

下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2022

オレンジコラム

第五回

実際にできていないことを、
できると言い張るのはなぜ？



永島 徹

「風呂にはちゃんと入っている」「着替えも毎日している」「薬も忘れず飲んでいる」等々、日常生活の中で、実際にはできていないことをできていると話すので対応に困ってしまうというご家族からの相談は少なくありません。これから介護サービスの利用を考えようという時や、利用しはじめてからも、そのような認知症の人の言動に振り回されたようになるがちです。

本書の事例5で登場する幸子さんの長女も、そんな状況にありました。社交的で世話好きな幸子さんの様子に変化が見られるようになったのは三年前。買い物に行き同じ物をいくつも買ってきたり、ゴミの日を間違えて近所から苦情が来るようになったりして、自信を無くした幸子さんは、家事もなくなり、自宅に引きこもるようになってしまいました。数ヶ月に一度は実家を訪れ、母の様子を見てきた娘さんは、訪問介護サービスを利用し、ゴミ出しや室内の清掃をサポートしてもらうことにしました。幸子さんが、ヘルパーの訪問を受け入れほっとしていたものの、しばらくして娘さんが様子を見に行くと部屋は散らかったまま。「いつもどこを掃除してもらっているの？」と聞くと、「自分でちゃんとやっているから、余計なことを言わないで」と怒鳴るようになってしまいました。そんなことが続き、娘さんはサービスがちゃんと提供されているのかを疑うようにさえなっていました。

です。実際にできていないことをできていると言い張ってしまう理由について本書では、「人間が最後まで持ち続ける（認知症になっても失われないもの）自尊心」だと解説されています。自尊心とは、自分で何かをやるぞ、これは自分でできるんだぞと、自身のことを誇らしく思える気持ち。実際にはできていないことを「できた」「自分でやった」などと言い張られてしまうと、つい「何を言っているの」と言い返さくなってしまいます。しかし、ご本人は「できない」と思われたくないという気持ちで頑張っているため、それを指摘することは逆効果です。そうしたことが続くと、日常で援助が必要なことも、関わりを拒むようになってしまいかもしれません。大切なのは「できなくなったこと」ではなく「工夫が必要なこと」ととらえ、その部分を応援する関わりを意識して増やしていくことです。ご本人も本当はできなくて困っているかもしれませんが。応援するような声かけや関わりはきっと受け入れやすいはずですよ。

なぜ、認知症の人は家に帰りたいのか

脳科学でわかる、ご本人の思いと接し方

著者：恩蔵絢子 永島徹

定価：1,760円（税込）

発行：中央法規出版



私たちは「下野新聞認知症カフェプロジェクト」を応援しています。